

OB 座談会「生研の生い立ち」

出席者

関野 克 東京大学名誉教授 専攻・生産技術史



関野 克 名誉教授



一色貞文 名誉教授

一色貞文 東京大学名誉教授 専攻・放射線工学

鈴木 弘 東京大学名誉教授 専攻・変形加工学
(非切削工作学)



鈴木 弘 名誉教授



勝田高司 名誉教授

勝田高司 東京大学名誉教授 専攻・環境制御物理学

鈴木基之 東京大学教授・所長 専攻・環境化学工学



鈴木基之 教授 (所長)



司会 橘 秀樹 教授

(司会者)

橘 秀樹 東京大学教授 専攻・環境制御物理学

橘 本日はゴールデンウィークの初日にもかかわらず、お集まりいただきましてありがとうございます。私、現在5部で音響工学を専攻しております橘でございます。所の出版委員会の委員長ということで、きょうは進行役をつとめさせていただきます。

きょうの座談会の趣旨は、現在の生研が今度駒場に移転するという大変大事な時期を迎えており、一つの大きな節目でございまして、千葉から麻布への移転のときに大変なご苦勞をされた先生方にお集まりいただき、いろいろなお話を伺いたいということでございます。そこで、まず最初に現所長の鈴木先生から、経緯をご説明していただきたいと存じます。

鈴木所長 昨年4月から所長をしております鈴木でござ

います。鈴木という名前では2代目の所長でございまして、鈴木弘先生が第10代、私が18代ということです。本日、先輩の諸先生方にお集まりいただきましたのは、実は鈴木弘先生といろいろお話をさせていただくなかからきっかけが生まれました。

いま、橘先生からお話でございましたが、生産技術研究所は、昨年3月末まで所長を勤められた原島文雄先生のもとで、今後の発展を期して駒場に移転するかどうかの意思決定について非常に慎重かつ十分な準備を進めてまいりました。

実は、現在の吉川総長を中心とする東大の本部の方で、将来の東京大学全体として「3極構造」という構想を立てております。これは、本郷、駒場、および柏を三つの極と

して東京大学を發展させていこうという基本構想です。

その趣旨は、本郷では既存のエスタブリッシュした学問を守り發展させていき、駒場の第二キャンパスでは学際的さらには産学が結びつくような研究を進めていく。駒場はかつて航空研究所あるいは理工研がございまして、昭和39年に宇宙航空研究所となり、さらに昭和56年に東大を離れて文部省に移管されました。この駒場Ⅱのキャンパスには、現在先端科学技術研究センターがございまして、その土地を先端研と生研とで共同で利用し、科学技術を中心とする学際的な研究拠点を作っていこうということです。

一方、柏の方は、まだ海のものとも山のものともわからないが何か重要になりそうな問題について意欲的な展開を図っていこうということで想定されています。こちらの方は新規に研究科をつくるというところからスタートし、同時に既存の理学系の研究所、物性研究所、宇宙線研究所がそちらに移転する。このような形での住み分け方が構想されています。

ご承知のとおり、六本木キャンパスでは、スペースの面と全体的に建物その他設備が老朽化していくという大きな問題を抱えていまして、所内の将来計画委員会、特に第6次の将来計画委員会、およびその後の臨時将来計画委員会で具体的な計画を立てまして、生研として新しい展開を図るとしたらどれくらいの規模が必要か、どのような構想で将来進まなければならないかというようなことを慎重に議論して参りました。駒場という土地と現在の生産技術研究所の組織から想定される規模、施設の大きさとのすりあわせをいたしました。その過程で、本部の方から、駒場での当面の整備計画として建築面積6万5000m²、現在の生研の建屋が3万3000m²ですので、約倍に近い面積ではどうかという示唆をいただきまして、それであれば駒場に対する概算要求をスタートしようということになりました。

計画は3期計画で、まず最初が2万3000m²、2期が2万8000m²、さらに残りが1万何千m²ということでしたが、もうすでに平成7年度の補正予算で平成8年度の要求の半分の1万1500m²という面積がつかえました。こういうことで、前倒しで計画が早まったわけです。1万1500m²というと、全体計画の6分の1ぐらいの面積ですので、第1期の計画としてはちょっと中途半端ではあるのですが、とにかくそういう形でスタートすることになりました。そこで、いま所内で大急ぎで全体計画を立てると同時に、具体的に第1期の計画の基本設計と実施設計にとりかかっております。幸いなことに、本部のキャンパス計画室という全体の中心的な設計をする部門におられる原(廣司)教授が駒場の設計も担当されております。実は昨日も夜遅くまで、原先生を中心として本質的なところから細部に至るまでいろいろな議論が進められました。連休明けまでかなり具体的なところまで話が進むことにはなりますが、何しろ大変な

大事業でございまして、所内でもいろいろな問題が想定されます。部の間であるいは各教官の間での考え方のぶつかり合い、面積その他を含めての調整などいろいろなことをこれから進められていかなければなりません。さらには、全体計画としてはあくまで6万5000m²を前提としてスタートしていますが、これがどういう形でどう変わっていくかというようなことも、心配しだすとときがありません。そしてまた、将来駒場で生研と先端研が一つのかたまりとなって科学技術の研究を進めていくということになりますと、必ずまた本郷の工学系とのいろいろな意味でのすりあわせが必要になってくるかと思えます。ここしばらく、生研は中で力を蓄えてきた時期、逆に言いますと、あまり外に曝されていない時期が何年かあったように思いますが、この新営計画が実施に移ると同時に、多分いろいろなところからいろいろなご意見をいただきながら、少し不慣れなこともやっていかなければいけないという事態もあるかと思えます。

先ほど申し上げたような六本木から駒場へというこの時期に、第二工学部をおつくりになって、それが生産技術研究所に移行した時期、また千葉からこの六本木に移ってこられた(その当時は麻布と呼んでいたと思います)時期、我々にとりまして今では10周年史、20周年史あるいは30周年史、そういうものを通じてしか知ることのできない大変な時期を実際にそこに参加して進められた先生方に、本日こういう形でお集まりいただきお話を伺うことができるのは、大変ありがたいことと思っております。

実は生産技術研究所の事務の方々のOB会がございまして、昨年度のその会で下村(潤二期)さんに初めてお目にかかったわけですが、その時に初めて生研創立当時のお話を伺って、ある意味で大変感銘を受けました。このことを鈴木弘先生にお話申し上げましたところ、東大百年史とか生産技術研究所の何十周年記念号とかの正式の記録とは別に、昔のことをご存じでいらっしゃる方々がお元気な間に当時のお話を伺い、いろいろなアドバイスをいただいていたことになりました。そこで今日は、ぜひその辺のお話を、あまりフォーマルでなくお伺いさせていただきたいと存じます。今現役の、特に若い先生方は、生研の千葉時代あるいは千葉から麻布への移転時代というのは、まったく活字を通してしか知らない世代になってしまいましたので、ぜひその辺のお話を伺いできればということでこの席を設けさせていただきました。

橘 ありがとうございます。この座談会のために何か参考資料と思ひまして、お手元にあります東大百年史の生研の部分を、これも本物が少なくなっておりまして、コピーを用意いたしました。もちろん、これにはかなりフォーマルなことしか書かれていないと思います。

私自身も、卒業研究で昭和41年に初めて生研に来まして、

当時の話はまったく知らない世代でございます。こういう公式の文書はふだんはあまり読みませんが、この機会にざっと読んでみて、当時は大変だったんだという印象を受けました。いま所長からもお話ありましたように、生研の生い立ちについて、今日はざっくりばらんないりんなお話をさせていただければと存じます。

関野 それでは私からお話させていただきます。私、この席で第一番目にお話したいことは、すでにこのような資料がありますが、こういった堅苦しいというかフォーマルな形にした記録ではなくて、本当に第二工学部を生産技術研究所に転換したときの各担当の教授、助教授、助手の方のいろいろなお気持ちをまとめた記録『第二工学部の歴史』という赤いバンドの入った本がございます。これには第二工学部をつくった過程についても書いてありまして、文部省にも提出したと思います。私も家で探してみたいけれども、ちょっと出てきませんでした。当時菊地先生がいらっやいまして、先生にご相談しまして、私と村松（貞次郎）さんとでその仕事をしました。

当時のことですから、がり版刷りなどの粗雑な複写技術でしたが、各教室ごとにいろいろな研究会だとか、方針を立てるための考え方とか、そういうものにつきましたとくさんの資料が各先生方のところにあったわけです。そういうものを何とか一まとめにしておかなければいけないということで、所長のところに秘書室みたいなものをつくって、皆さんから大小なく記録を全部そこへ提出してもらって、それを分類整理しました。それを村松君たちが中心になって、章、節ごとに全部カード化したわけです。それをもとに最終的にまとめたのがさっきお話した赤い線が入った報告書で、これは第二工学部の歴史みたいなものなんです。皆さんが提出された資料というのは、これは文部省や東京大学の正式の資料でもないわけで、教授や助教授、また若い先生方の意見が入っています。そういうものを章、節を立てて一つのカードで整理しました。そのために縦のロッカー二つ分ができたわけです。このような記録には、その当時のほんとに細かいこと、皆さん方の考えられたことや実際にやられたこと、あるいはそれに対するいろいろな批判的なことも入っています。現在も保管されているかどうか分かりませんが、とにかく我々の若い時代にそういうことをしましたということをここで申し上げておきたいと思えます。

橘 それは何年頃ですか。

一色 第二工学部創立25周年を記念して昭和43年11月に発行したものです。実は数日前、その「東京大学第二工学部史」を見ましたが、関野先生がご苦心になったのもよくわかりました。菊地所長のときで、所長秘書室に集められた資料の入ったロッカーがあったのを確かに覚えております。

関野 それはほんとにその当時の生活そのものというか、

皆さんの日頃の生活まで全部載っています。それから、たとえば定期だとか切符だとかまで入っていて、大変面白い。

実はこれができる前に、当時の責任をもたれていた瀬藤先生の事務所へゲラ刷りを持って行って、原稿のままお見せするのは失礼かと思ったけれども、第二工学部の歴史をこういった冊子の形で出すことをお許し願いたいと申し上げたんです。そうしたら、瀬藤先生は大変お喜びになりました。それで結構だとおっしゃっていただきました。これは第二工学部の歴史ですけれども、生産技術研究所に交代するところまで入っていますね。

一色 入っております。

関野 このような記録があって初めてこのようなフォーマルなもの（東大百年史）ができたわけです。（鈴木弘先生に）覚えていらっしゃるでしょうか。

鈴木（弘） あれには私もずいぶん書きました。

一色 そうでしょう。鈴木先生が第二工学部に来られた当時の思い出なども書いておられます。

鈴木（弘） 実は浅原先生と私と二人で書くことになったんですけれども、浅原先生のご希望を受けて私一人で書いたものですが、名前は入れなかったんです。かなり長いもので、生産技術研究所の歴史、それから千葉からの移転のいきさつ等について書いてあります。

所長 これはたぶん現役の先生方はあまりご存知ないことかもしれませんね。第二工学部から生研への転換の過程では、たとえば講座数の問題から新しい組織をどう作るか、他部局とのいろいろなやりとりとか、いろいろなことがあったらと思うんですが、所内でもたぶんいろいろな軋轢があり、やっぱり数が減るといのは大変なことですね。そういうようなところのことまで踏み込んでお書きになられたのですか。

一色 ええ、そうですね。たとえばこれ（東大百年史）に書いてないことですが、経済学部の大内教授が第二工学部をつぶしてしまえといわれたことも書いてあるんですよ。つまり第二工学部は戦争中にできたものであるし、工学部が二つあることも東大としてバランスがわるいと。それから当時、終戦後2、3年というところですね。第一、第二両工学部の卒業生の就職が必ずしもよいというわけではなかった。我々としては、将来は工業で確実に立っていかれるということは主張したわけですが、文科系から見れば、そんなのつぶしてしまって文科系に分けると、そういう議論をしているわけです。そういうことも書いてありますね。

鈴木（弘） 表紙に赤いストライプが入っているのは、25周年記念のものですね。それは、いまおっしゃったようにフォーマルな資料も入っておりますけれども、それぞれ分担しまして、自分の主観を交えながら書くことが求められたものなんです。そんなわけで私も多少主観を交えて書き

ました。しかしそれでもやはり遠慮があって書けなかったこともあるんです。

というのは、その当時文学部の辰野隆（ゆたか）先生の『辰野隆対談集』というのが岩波文庫で出たんです。それを読みましたら、第二工学部が戦時中にできたいきさつについて「東大としてはなはだ納得しがたいいきさつでできた」ということを経済学部部長の長老教授がお話になったことなども載っているのです。そして経済学部、文学部、法学部の3学部では、終戦後第二工学部を正規の形に直すべきであると考えて、それをやってもらうためには南原先生を総長にしなければいけないというので3学部が協力して南原総長を実現させた、そんなことが書いてあるのです。ところが、フォーマルな席上で第二工学部側からは、第二工学部を廃止して第一工学部と合体したいという意思表示が出たので、我々としては、それをどのようにして軌道に乗せるか大変苦慮していたところへそういう話が出たので、事の意外に驚き、また喜んだ、とまで書いてあるんですよ。

それから瀬藤先生が、第二工学部廃止に伴って生産技術研究所に転換すべきであり、将来の日本を考えると工学は非常に重要であるから、大学としてどうしてもそれをやらなければいけないということをおっしゃったら、文学部の有力教授が、「そんな話は今ここで聞く耳持つ人はいませんよ。壁に向かって話したらいいでしょう」とまで言われた。そんなこともあったんですね。これは辰野先生のお話に乗っていたのではなくて、ほかのほうから伺ったんですけど、そんなわけで、第二工学部から生産技術研究所に転換するというのは、本当に嵐の中でやっと踏み止まって、そこまで持っていってくださったわけで、私は先輩の先生方のご尽力に非常に感謝しているわけなんです。

橋 その当時の第二工学部を生研へという話のときに、工学か理学かというような議論がずいぶんされたという記録があるのですが。

鈴木(弘) これ(東大百年史)に書いてありますね。ですけれども、私にはそういう記憶はありませんですが。

一色 あんまり印象に残っていませんね。フォーマルにはこういうことなんでしょうね。

所長 理工研との合体論というGHQのほうからの圧力というのはかなりございましたか。生産技術研究所になるのではなくて、航空研が理工研になるところと合体して一つの研究所にしてはどうかという。

鈴木(弘) そのへんは私などのような若い者には詳細は聞こえてきませんでした。

一色 あんまり大きな圧力ではなかったんじゃないですか。むしろ東大の中ですよ。

鈴木(弘) たまたま瀬藤先生、井口先生、兼重先生の3人の方が、大学制度をどのようにするかという委員会に出ておられたんでしょう。

関野 若い人も出しなさいということで、僕は40代を代表して出たですよ。

鈴木(弘) 関野先生は第二工学部を設立する際にも幹事的なお立場でいらしたこともありまして、生産技術研究所をつくる頃なども、お若い先生方のなかではそういう問題にかなり深く関与しておられたように記憶しております。

一色 だいたい原っぱの中に建物を建てるわけで、各教室の意見を全部関野先生のところへ持って行ってやっていただいていた。それから、設立した当初は主任会議というのがありましたが、その下に幹事会というのがありまして、そのヘッドが関野先生で、時間割りの編成とかすべて先生が中心になってやっていただいていた。ですから、設立当初のことについては関野先生が一番詳しいですよ。

鈴木(弘) ところで、私はこの座談会のテーマがどのようになるのか、そのへんまだよく理解しておらないんですけども、先ほどの所長の話のように、今度駒場に引越して2倍の面積になるとか。しかもそれに伴って部門数まで8部門も増えるとかいう、大変なことですね。

所長 それは新しいセンター(国際産学共同研究センター)ができるということです。

鈴木(弘) 非常に発展的に移転する、こんなふうになっていったのも、生産技術研究所というものが非常に力量があり、また実績が大きかったということがそういう結果をもたらしたのではないかと考えております。ところが生産技術研究所というものができました昭和24年を考えると、日本の大学付置研究所でたくさんの研究所がありましたけれども、すべて単一目的の研究所であって、総合工学研究所というものができたのは初めてです。そのような生産技術研究所というものが誕生したのは、第二工学部が存在していたからこそ、それが起こりえたと思うんです。

そういう意味で、生産技術研究所の歴史を考えるとときには、第二工学部の誕生というものを抜きにして考えることはできない。その第二工学部の誕生について現在一番記憶をたくさん持っておられ、また現実に関与されたのが関野先生ですから、関野先生にご出席いただいた機会に、できれば第二工学部の誕生から話を始めていただいて、それから生産技術研究所の誕生、そしてまた麻布への移転と、そんな内容について記録を残していただいたら若い方々にとっては大変参考にもなるし、またご興味のあるものができるのではなからうかと思うんですけれども、いかがなものでしょうか。

関野 いやそこまでちょっと。私にとってはだいぶ昔の話になっているものですから。さっき申し上げたようなものを一応文字として残してはあるということだけを申し上げておきたいというのが私の最小あるいは最大の望みなわけです。

所長 戦争目的ということがあったにせよ、その当時、科

学技術の生産力を上げていくというのは非常に重要であったことは誰にも分かると思いますが、それを工学部を拡充するのではなくて、第二工学部という形で別につくった理由は何かあったのでしょうか。

一色 それは私から言わせていただきます。私、昭和11年の卒業なんです、その翌年に支那事変が始まりまして、私よりちょっと前の昭和8、9年ぐらいに卒業した方は、大学は卒業したけれども、就職できない方がありましたが、私のときになって4月には全部就職した。満州事変がすでに始まっていたので、技術者が要るわけです。しかし、会社が人を採ろうと思っても許可がないと採れない。いわゆる「切符」と称していましたが、つまり軍需工場優先で、工学部の出身者の採用では、どの会社には何人、どの学科は何人、そういう割当てがありました（昭和14年卒業生から適用された）。その前に、昭和13年入学生から臨時定員増ということで工学部の定員を2年続けて2、3割増やしました。ところが建物の面積が増えたわけではないし、教官の定員もそのままです。しかしそれでは間に合わないし、優秀な学生はやっぱり東京大学という看板で大勢来るわけですから、もう一つ学部をつくる以外にないということになりました。当時は資材がないと建物も建たないし、変圧器一つ買うにしても銅の切符、鉄の切符、油の切符がないと買えない時代ですから、陸・海軍が半分ずつもつということで新しい学部をつくることになった。本郷ではとてもスペースが足りないので、本郷以外につくるということになったわけです。臨時定員増は全国の大学でやったけれども、とてもそれでは追いつかないということだった。

橘 工学部の増強というのは、ある意味では国策ではあったのでしょうかけれども、具体化したのは東大だけですか。

一色 そうです。単科大学でもよかったわけですが、それじゃあいい人が集まらない。やっぱり東大があるからということで、原則として、本郷の工学部教官のうちで半分は第二工学部へ行けというわけですよ。それで本郷の方でも新しい教官を採るし、第二工学部でも本郷から行っただけでは足りませんから、他からも大勢採りました。そういういきさつだったと私は記憶しております。

鈴木(弘) おっしゃるとおりで、東大の工学部は昭和13年度の入学生から2割ぐらい入学生を増やしたんです。私の知っている機械科では、我々の頃は78名だったのですが、昭和13年入学から2年間100名になった。就職の切符が厚生省を通じて配給制で出るようになったのが昭和14年度の卒業生からです。工学部の卒業生を増やさなければいけないということを海軍が非常に熱心に考えて、陸軍もそれに賛同してという空気のもとで第二工学部は昭和17年に初めて学生を入れたわけです。おそらくその1年半か2年ぐらい前から大学と文部省、軍部との間でそういう話し合いが

あったのではないのでしょうか。

私の聞いているところでは、当時の東大総長が平賀先生、海軍の造船中将の方で、軍艦設計に革命的な進歩を実現して軍艦の父といわれ、海軍の現役を終えて後に東大の総長になられた方ですけれども、その方がたまたま総長であったために、そういう点に非常に理解があったということもあったんじゃないでしょうか。真相は知りませんが、法学部や経済学部では、評議会の議を経ないで第二工学部をつくったということで第二工学部鬼子論とよく言われたんです。本当かどうか知りません。とにかく、各大学の定員増だけでは到底足りないから、力がある東大にもう一つ工学部をつくってほしいという要望でできたのだと聞いております。

所長 出来上がったときのそういういろいろないきさつが、終焉のときにも尾を引いたということがあるんですね。

鈴木(弘) 経済学部では、何人かの方がパージになったわけですよ。戦時中だということで、共產主義的思想の人は学外に出ざるをえなかった。その時期に工学部だけはいい思いをしたというふうに言われるんですが、本当に評議会の議を経ってなかったのかどうか、そのへんはいかがなんでしょうか。

関野 いや、わかりませんね。しかし、確かにあのときの総長の力はあったし、内田先生（工学部建築科教授、後総長）も一応協力されたという形で。

鈴木(弘) 内田先生は平賀先生の次の総長でしたね。

関野 そうそう。内田先生もやはり力がおありだったですよ。

橘 その頃、第一工学部と第二工学部が併置されていたわけですがけれども、学生から見てカリキュラム的にはどうですか。まったく同じような教育をしていたわけですか。

一色 ええまあそうです。学科としては10学科ありまして、火薬というのは本郷にあったのでそれはこっちにはなかったんです。それから鉱山がなかったですね。

橘 講義ではだいたい同じようなことを教えていたのですか。

一色 だいたい同じでしたね。

鈴木(弘) 同じでなければいけないという理由はなかったんです。それぞれの教授陣で最良と信じたカリキュラムを組んだわけですから、似たものになったのでしょうか。私はあとから伺ったのですが、学生の質を等しくするために入学試験の成績順に並べまして、1番がどちらへ行くかは第一工学部長と第二工学部長がクジをお引きになって決め、2番を相手の方、そうすると3番を、仮に第一工学部が1番をとると第二工学部は2番、3番をとって、第一工学部がこんどは4番、5番をとる。両方の定員が等しければそうする。定員が等しくない場合には、数学の先生が両者の順位の平均値が等しくなるような式を作ってお分けになっ

たということです。私の知っている機械科の学生で、西千葉駅のすぐ近所に住んでいるのに本郷へ通っていて、逆に本郷の赤門前の西片町から第二工学部へ通っている学生がいました。それが別に大した不満もなく実現できる時代だったんですね。

橘 学科によっても違いますけれども、本郷の工学部と生研というのはある意味ではすごく張り合っているところがありますが、その当時は一工、二工というのは、いろいろライバル意識みたいなものはなかったのですか。

鈴木(弘) 戦時中はまったくなかったですね。

一色 ライバルという感じはなかったですね。いつも懇親会をよくやりましたのでね。ただ、向こうよりもこっちのほうが食物が豊富にあるというので、第二工学部に本郷の人に来てもらったり、スポーツの交歓やったり、学生同士は仲良かったですよ。

所長 一つの工学部を大きくするのではなくて、二つにしたというのは、どこかにある緊張関係を期待したのかなという気もしたんですが、そういうことはなかったんですね。

鈴木(弘) まったく物理的な理由からですよ。とうてい本郷にもう一つの工学部を入れる余地はないということだったと思いますね。

関野 簡単に言うと、工学部の定員を来年から倍増するということです。それでは本郷のキャンパスには全部入らないから、半分は千葉なら千葉でという形なんです。それで、学生の分け方はさっきの話のように数学の先生が全部やってくださったわけで、学生を二つに割って、両方とも等質という考え方なんです。恨みっこなしという形でやったわけですが。ただ航空関係とか原動機とか、特別の学科が片方にあると片方ないというのはありましたけどね。だからそういうところでは新しい意味が出てくるわけですよ。第二工学部の方で、第二工学部を生研に持っていくということは、大学院大学という考え方がそのときに強く出たというふうに僕ら記憶してますけどね。

橘 生研に移行する、要するに二工をつぶすというのは、我々が聞いているのはGHQから非常に強い圧力があったという話なんですが。

一色 そうじゃないですよ、学内ですよ。

関野 それは全然ないですね。

一色 ただ、航空はいけないということはいわれた。それはつぶされたんです。

勝田 ところで駒場への移転については、もう予算もすんなり取れちゃったわけですね。それで工事もやると。

所長 ごく最初の一部分だけなんですけれども。

勝田 そこまで来てれば、もう計画どおりいかなければいけないわけですね。そこまでくるのに、3極構造で生研をあそこへ持っていきこうということを生研の先生も一緒に決めたんですか。

所長 それは我々の将来計画としてはこういうものをという形で生研の中で決め、それを向こう側で認めたわけですね。

勝田 3極構造についても、年次計画など早めに東大内部、文部省、大蔵省の関係窓口で相談して内容をよく理解してもらうことが必要でしょう。こうしたことは、事務担当者と一緒に、できれば研究者が直接するのがよいと思います。陳情を日ごろから続けていると、外部と内部とにどういう問題があるのか自然に分かります。生研についても、PRの出版物が良い話題になりました。国有地の使用をする場合は、どうしても競合があったりして、希望通りに行かないことがあります。

橘 今日の座談会の一つの大きなポイントですが、麻布への移転の話が起こったのは昭和32年ぐらいですか。特に今日お聞きしたいのはそのへんです。大変なことですよ、研究所の移転というのは、われわれも現在直面しているわけですが、所内でどういう形で議論が進められたのか、あるいは研究者というのはそれぞれかなり独自の意見というのか、要するに我侭勝手な人が多いと思うけれども、そういう中で所内の意見をどういう形で統一してきたのか、それから、いま勝田先生もお話になられましたけれども、お役所はじめ対外部、これは東大本部もあるかと思うんですが、それへの折衝の戦略的、戦術的な話、その辺を今日はぜひ伺いたいと思うんですけども。

鈴木(弘) 今回の六本木から駒場への移転については、まだ歴史としては語るには生々しすぎて、またこれから先変化もあり得るので、ここではわれわれが口を出すべきことではないと思っているんですよ。むしろ第二工学部がいかにして誕生し、いかにして廃止されたか、そして生研の麻布移転がなぜ行われたか、その辺までが今日の座談会のカバーする範囲ではなかろうかと思うんですけども、いかがでしょう。

私の知る限りでは、大学などで非常に大きな変革が行われたときに、内部からの声によるのではなく、外部からの強制力によって変革したという例は、日本ではまったくないんですよ。第二工学部が誕生したのも、やはり東大内部で、少なくとも工学部などにはそれを受け入れる下地が十分あったから、軍の要請、というよりも時局の要請を受け入れて実現したんだと思うんです。それから第二工学部が廃止になったのも、やはり大学内部の声によって起こったのであって、外部からの強権によって実施されたものではないですよ。そういうわけで、第二工学部を廃止するようになったのも、さっき一色先生がおっしゃったように、まったく内部、しかも第二工学部がむしろ率先して声を出したというところからスタートしているように思うのですがいかがでしょう。終戦後の民主主義というかけ声が非常に盛んな時代に、学生を強制的に二カ所に分けるなどということは不可能であろうと。そうすると、なんといいても

時計台のある銀杏並木のキャンパスと、千葉の砂ぼこりの吹きすさぶところでは学生の質に差ができてくるのではなからうか。これは第二工学部を担当する教官としては耐えがたいというお気持ちが皆さんに非常に強かった。それと、木造の建物で、現に応用化学で火災があったのですが、いつ火災があるかもしれないという心配にしょっちゅう苛まれていた。当時の計画では、本建築移行は15年間で400坪ずつという話、しかもそれが中断しながら何十年かかるかわからないというような状態では、とうてい我慢できないから早くなんとかしたい。そういう気持ちが一番大きなモチティブフォースではなかったかと私は思うんですけどね。

一色 もう一つ私の印象では、なぜ東京かということですね。一番大きな原因は、大学院学生をとりにくいことです。講義が本郷であるわけで、学生が午前中本郷へ行って、午後帰ってきて生研で実験、研究やるというのは極めて困難です。それで、そのために本郷の卒業生は第二工学部の大学院へ来たがらないんですよ。第二工学部で大学院生をとっても他大学の卒業生しか来ない。都内ならば、午前中本郷へ行って、午後麻布でやっていける。それが麻布移転の一番大きな原因ではなかったかと私は思っています。

麻布の前に恵比寿という案が一度ありましたね。もと海軍の技研があった所で、後に金材研です。しかし、それはだめになった。麻布というのは突然出てきたようですね。

鈴木(弘) 一色先生のおっしゃるとおりなんですけど、それは移転のときの問題なんです。新制の第1回卒業が28年であって、第二工学部廃止が決まったのは昭和22、3年頃ですね。その当時はまだ大学院の問題はそれほどクローズアップされていなかった。移転のときはおっしゃるとおりです。第二工学部の廃止は、むしろ第二工学部の教官の希望が一番強かったと言ってもいいぐらいではなかったかと思えます。

一色 そうですかね。廃止やむなしということは全部一致して、しからばというので、独立論もあったんですよ。当時は学部学生を失うということに非常な淋しさを感じたわけですよ、少なくとも私は。それで研究所か独立かという、一時そういう議論もあったと思いますよ。

鈴木(弘) 瀬藤先生は独立論だったんですよ。しかし、「独立論を唱えようと思ったけれども、後ろ向いたら着いてくるのは4、5人しかいない。その状態では僕はあきらめるよ」とおっしゃった。それで瀬藤先生が研究所をつくることを非常に熱心に推進してくださった。そして初めは35部門だけだったのを、別に講師の定員を10人採るとか、いろいろ瀬藤先生が増強を図られましたね。

橘 独立論というのは単科大学としての独立でしょうか。

一色 まあ、つまり東大から離れてでもね。

橘 その当時、研究所というと一種の大学院大学的なもの

も想定していらっしたのですか。

一色 結局はそれでみんな納得したわけなんですよ。

鈴木(弘) 私は実は独立論の賛成の一人だったものだから、大変その印象は強いんですけども、第二工学部全体としてはあまり大きな声にならないうちに瀬藤先生が全体の動きを推察なさったんでしょね。研究所のほうに転じられたんです。

所長 そのときには千葉大学との土地の交換というのはもちろんまだないわけですね。

一色 全然そんな話はなかったですね。

所長 独立論のときには、千葉大学という形は念頭にはなかったのでしょうか。

鈴木(弘) まったくない。

所長 むしろ工学系の単科大学ということでしょうか。

一色 千葉が東大を呼んだわけでしょう。ちゃんと土地を世話して、ですから、できた当時は、よく来てくれたということだったんですよ。

関野 千葉大学という話は、ともかく日本の全体の県に一つずつ大学をつくるという考え方から、千葉市としてはぜひということであったと僕は思うんです。こちらの方の教授陣の中でも多少そういう気持ちをもたれた方もなきにしもあらずと僕は見ているわけです。

ある時、僕は千葉県に呼ばれて、千葉大学を承知してくれるのかという話が出まして、僕は初めからそれは問題にならなんでしょうとはっきり言って帰ってきたんです(笑)。それもだいたい大胆だったんですが、一応そういう形で丸くおさめようという形もなきにしもあらずだったと思います。そのことは二度と話が出ませんでしたね。

橘 場合によっては千葉大学工学部みたいな形になった可能性も。

鈴木(弘) 新制大学の話は昭和28年頃で、生研独立論は昭和21、2年ですからそれはないですね。

橘 独立という意味では、千葉工科大学みたいな感じですね。

関野 それはそれからあとですよ。所長をやられた土木の福田先生、あの先生のお考えは千葉工科大学でしたね。それは時間的にもずっとあとですよ。

鈴木(弘) 第二工学部をどうするかという話は昭和21、2年頃ですね。ですからその頃はまだ、どこにということではなくて、もう敷地は今の敷地でやるのだと。名前はなんとつけてもいいではないかと。要するに独立の単科大学で、東京工業大学があるのだから、あれに対抗して、あるいはさらに優れたものをつくれればいいではないかというような考え方だったんですよ。

所長 非常に魅力的な面もあると思うんですけども。

一色 それじゃ東大は手放さないわけですよ。要するに講座を分捕ろうとしているわけですから。定員だけよこせと

いうわけでしょう。

所長 その辺の話は、もちろん最終決定は評議会としましても、総長のもとに何かの委員会ができたわけですね。そこでどういう形で決まっていたのでしょうか。

鈴木(弘) 現在ではもうご存知の方はいらっじやらない。

一色 それはわからないですけども、教授35、助教授33で35部門というのは、各教官の定年を考えると出血しないで済む数なんです。私はそう理解してるんですよ。ただそれが後まで尾を引きまして、助教授の方で教授になる資格があっても、抑えられて上がれない。また助教授もいっぱいですから、大学出た若い卒業生も助教授にできない。そういう人事の停滞がかなりあと尾を引いていると思います。

鈴木(弘) おそらく経済学部、法学部あたりで、裏話としてはいろんなものがあつたと思うんです。しかしフォーマルに外へ出てくるのは、必ずしもそういう形で、生で出てきたわけではないようです。それから工学部の方でもいろいろな考えがあつたようです。これもほんとにフォーマルな形では表へ出てこなかった。その段階で、第二工学部の方がむしろ、ぜひとも現状を打破したいという気持ちがあつて、非公式に学科同士で、親密な先生同士で話をされたのがありまして、いくつかの教室の先生から、第一工学部のほうでは、第二工学部が合体するようであれば受け入れるよということを個人的には言ってもらっしやる方があるということを教授総会でご披露がありました。3教室ぐらいでした。しかしそれはまったく個人の気持ちとしてお話になったので、正式に受け入れるということを教室会議で諮ったような話ではなかったようですね。

橘 これ(東大百年史)を読みますと、総長のもとに工学関係新制度実施準備委員会というのが組織されていますね。

一色 それは確かにあつたんでしょうね。

橘 それで、第二特別委員会という、瀬藤先生が委員長ですか。そんなことが書かれています。

鈴木(弘) 当時井口先生が学部長だったものですから、井口先生が主として発言なすつたと思います。あるときに井口先生が教授総会で涙を流してお話しになったことがありました。自分が善意で発言したことが第二工学部にとって非常に不利につながつたというので、声涙ともに下さるお話が一度ありました。

橘 生産技術研究所という名称ですが、生産科学研究所というのも候補になつたとか。

鈴木(弘) その話は教授総会などではあまり出ておらないですね。

関野 インダストリアル・サイエンスというのとテクノロジー、どっちにするかということで。結果的には数学の山之内恭彦先生がインダストリアル・サイエンスということをおっしゃって、あの先生の主張がいちばん強かつたのではないかと思いますね。

橘 生産技術というテクノロジーになってしまいますが、英語はサイエンスですね。

一色 初めからサイエンスです。

関野 日本語ではテクノロジーですね、技術といえば。山之内先生がだいぶ強くサイエンスと主張されまして、サイエンスの中にテクノロジーはもう入っているということではないですかね。

鈴木(弘) そのへんに非常にご苦労があつたようですね。というのは、ドクター・ケリーという総司令部の顧問がいましたが、その人が、東大の中にはすでに理工学研究所ができています。航研が転換して理工学研究所になっていましたよね。それがあつたのもう一つ工学系の研究所をつくる意味はないじゃないかということで反対があつた。これに対して瀬藤先生がお考えになつたのは、理工学研究所は読んで字のごとく理学と工学の中間をやる工学の研究所であり、今度の生産技術研究所というのは、工学と工業との間を橋渡しして、従来日本の技術がすべて海外導入で切花を活けていたのを、種から育てるのだと。そういう研究所をつくるのだから性格が違うんだということをお説きなすって、結局ドクター・ケリーもそれを納得したというふうには承っています。

所長 できた当時の組織表を見ますと、試験工場というんでしょうか、我々の今の試作工場とは別に試験工場的なものが書いてある。あれはどのようなファンクションをもつた組織だったのですか。

鈴木(弘) 基礎研究を現実のものに、ハードウェアにしていくということです。当時理化学研究所がありまして、非常に優れたものづくりの技師が二人(小野、綾部両氏)おられたんです。その二人がおられるために理研の基礎研究が非常に進んだ。そのことを瀬藤先生はご存じだったものですから、生産技術研究所も、研究の成果をもの形にしていく、そして工業技術に結びつけていくためには、そういう工場が必要だとおっしゃつたんです。しかし、結局はそういう機能のものにはなり得ないで、現在の試作工場になつたんです。

所長 そうだったのですか。こういう経緯を経て生産技術研究所になってからは、ほんとに先生方のご苦労で現在に至るわけなんです。そういう意味で昨年の国際的な評価、外部評価の機会にも、生研の組織について、研究室単位で個人研究をしながらまたグループ研究をしていくというやり方が非常に高く評価されました。すべてそういうことが出発の時点でだいたい定められたスタイルなんですよ。そういう意味でも我々非常に感銘を受けましたけれども、研究所になって、またそれから麻布へ移転するという、いろんなドラマティックな変化があつたわけですね。この資料を見ましても、想定された面積がずいぶん小さくなつてしまつたり、いろんなご苦労があつたように思うんですが、

そのへんのところはいかがでしたか。私が特に関心がありますのは、所内でどういう形で意思決定をなさり、委員会なり組織なりで何を検討され、最終的な判断はどういう形で下されたのか。麻布のハーディバラックの話は文部省から来たわけですね。

一色 そのようですね。

所長 それを受けて、たぶん極めて短期間の間にいろんなことを判断しなければいけなかったと思うのですが、このへんは所内では？

鈴木(弘) 所内では、先ほど一色先生や関野先生がおっしゃった大学院問題、これが非常に強い動機になったわけです。

所長 そうすると移転するということが先にあったわけですか。

一色 そっちのほうはわりあいに、いいところさえあればという気持だったですよ。

鈴木(弘) だから赤羽の兵器廠を見にいったり、海軍の技研、目黒の技研跡を見にいったりしたんですよ。私なども、どなたかのお供をして海軍の技研を見にいきましたね。

橋 議論の過程で、千葉で固定施設をしっかりと持ってやっていこうという意見と、先生がおっしゃったように東京へ出ていこうという、いろいろ議論があったという話も伺いましたが。

一色 やはり大学院を重視していましたから、東京へ行きたいという意見が大勢だったと思うんですよ。

鈴木(弘) 大学院がなんといっても非常に大きな理由でした。とにかく、本郷で学部教育を受けた人間が千葉へ来て、そしてスクーリングは大学院でも本郷へ行って、向こうで一緒にやるのだということだったら非常に時間のロスがありますから、とても成立しないだろう。だから本郷と20～30分で移動できる距離に行くべきであろう、ということとは皆さんの基本的な考えとしては一致していたと思いますね。

一色 第二工学部ができた当初、応用化学と冶金は、1年生から分析化学の実験があるんです。しかし建物がなくて、一回生は本郷へ行って実験していたんです。それは大変でした、そういう時間割を組むのも。そういうことで、学部学生はもちろん、大学院の場合も千葉で講義ができればいいんですが、それでは単位が取れないものですから、どうしても研究科の授業は本郷でということになっていました。

鈴木(弘) 大学院の問題や木造家屋で火災の危険があるということ、皆さんにはちょっと想像できないかもしれませんが、その当時は電話すら東京に容易にかけられなかった。非常に不便だったんですね。

一色 建物も戦争中に建てたので、床もがたがたになっていましたし。麻布移転も3年かけてやったけれども、そん

なに苦労したという記憶はないんですね。

橋 さっき勝田先生が言われたように、最初の条件とからはかなり違ってしまったわけですね。

一色 外部との折衝では面積を減らされて、それはずいぶん苦労したけれども。

勝田 鈴木先生や皆さんが偉かったと思うのは、ここ(千葉実験所)を相当残しておいたということなんですよ。だけれどとにかくそこまできたら。

鈴木(弘) 私の記憶では、かなり早い時期に教授総会で原則の決議があったんです。千葉で建物は1万2000坪使っている。それよりも多少は狭くなることもあるかもしれないけれども、それに近い建物面積をキープすること。また敷地は3万5000坪を最小限度確保したい。それから移転の経費は十分出してもらって、研究設備等で老朽化しているものはその機会に更新するということもあわせて考えてほしい、この3原則があったんです。その3原則が決まった後にいろんなところを探しはじめた。そのときに、谷先生の所長時代に、麻布がたまたま話が入ってきたんです。それで谷先生がすぐに決をおとりになった。非常に早く決をおとりになったんですね。そして次の福田先生が所長になられた段階で、総長の茅先生が麻布に大変尽力してくださったんですが、茅先生としてはもうひとつご希望がありまして、当時物性研が工研の中にいたんですけれども、これは物性研ができるときに、やがては外へ出るからという約束があったんだそうです。それで茅先生は、物性研を早くどこかへ収めなきゃいかんということをお心配しておられたものですから、生研を麻布へ持っていくとすれば、その機会に物性研もその中へ入れたい。むしろそういう希望があったので、非常に尽力してくださったという面もあったらしいんです。

その決定権は大蔵省ではなくて、大蔵省の出先機関みたいな、国有財産審議会が決める。この審議会の審議委員には民間の人がかなり大勢入っていたんです。それで生研の教授、助教授を総動員しまして、審議会の委員に個人的に縁の近い人は尋ねて行って生研の実情をよく説明して、麻布の土地が実現するように努力してほしいということをお願いしました。私も審議会の委員の一人と比較的近い関係でしたので、そのお宅へ尋ねて行ってお願いしたりしたんです。

その段階で、茅先生が公的には国有財産審議会に熱心に交渉に行かれた。山田という局長だったんですが、茅先生が、東大総長が行かれたのに、机の上へ足を上げたままで応対して、けんもほろろの挨拶をした。茅先生が腹を立ててお帰りになればそれで片づくという腹だったのでしょうか。それでも茅先生は我慢して、ぜひお願いするということでお帰りになった、というようなことがあったらしいんです。

いよいよ生研が東京へ引っ越すからということになって、

福田先生が全所会議というのをお開きになったところ、瀬藤先生や星合先生のように千葉の土地に非常に愛着をもっておられた方は、「大変狭いところへ行くのはなかなか問題だから、慎重に考えた方がいい」というようなこともおっしゃったらしくて、どういういきさつでそうなったのか知りませんが、「今後、所長が総長はじめ外部のところへ土地の交渉に行くときは、教授総会のメンバー誰か一人を帯同して行く」ということになったらしいんです。そしてどういうわけか、鈴木を連れていけということになったので、その後、私は福田先生のお供をして行ったんですけれども。

そうしましたら、いま勝田先生からお話があったように、麻布の土地3万5000坪のうち半分は東京都の緑地帯になるという話で、残りの半分の中にNHKが入るから東大はほんの一部だというような話がありました。NHKはその後代々木の方へ広い土地を確保して下りてくれたのですが、そうすると今度は、学会会議と物性研を一緒に入れるのだということになったわけです。それで私は茅先生に、「実は所長からお聞きと思うけれども、生研としては3万5000坪の土地が欲しいということが教授総会の決議になっております」と言いましたら、「そんなことは僕は聞いとらん。そんなこと今から言われたらもう話にならんよ」と叱られました。私は正式に総長に交渉する立場ではありませんから、それ以上言葉をつがなかったんですけれども、福田先生はそれをやむを得ないものとしてお受けになったわけです。そのようにいきさつがあって1万1000坪で物性研と生研が入ると決まったんです。

橘 記録によりますと、昭和34年3月に生研の教授総会で移転が正式決定されています。そのときに五つぐらい条件がついているようですけれども、今考えると難しい条件もかなり入っていますが、そのなかでいちばん我々としてありがたいと思うのは、千葉実験所を残すことが最初の条件に入っていますね。

ところで、先ほども勝田先生からPRが非常に大切だというお話がございました。ちょっと話はそれるかもしれませんが、私は現在出版委員会をやらせていただいています。昨年からは掛の名前が出版掛ではなくて情報普及掛に変わりました。これは所長の強い意向でもあります。掛の機能を少し広げていこうということで、単に出版だけではなくて、たとえば最近のインターネットを使って情報を発信するとか、そういう形で対外的な活動に力を入れようということです。その他に研究交流委員会というものもございまして、これも対外的な活動をしています。それはともかくとしまして、この記録を改めて見ますと、『生産研究』が昭和24年からですか、『生研報告』もずいぶん古いですよね。それよりも先に生研パンフレットが出されていますし、昭和26年に『東大生研案内』。年次要覧も含めてこれ

らは現在でも続けて出版していますが、すごく早い時期からこのような出版活動に力を入れてきたというのはすごいなという感じがします。これだけの出版物、特に月刊誌をずっと出してきているのは、大学や研究機関ではほんとうにまれな例だと思います。

所長 いまいろいろな外部評価というのが流行みたいになっておりますけれど、ある意味ではその前に内部評価というのがありまして、その内部評価をかなり早い時期からきちんとした形で実現しているということで、生産技術研究所が文部省の側から非常に高い評価を受けました。ですから、文部省は他の研究所からどういう形で内部評価をしたらいいのかと問われたときに、生研の年次要覧を一つのお手本にするように言っているそうです。そういうことも、先輩方の工夫の上に立ったご努力の賜物と思います。

鈴木(弘) 外部から非常に評価されたことがもう一つあります。教官研究費の約20%近くを別にプールして、特別研究費ということで、所内で審議して若い人の研究を奨励する、これは非常に立派なことだということで、文部省はじめ他の大学からもずいぶん高く評価されましたね。

勝田 生産技術研究所を一般に理解してもらうためのPRは、特に移転と関係なくとも続けていただきたい。広く公開しているのは誰でも感心します。僕らも、外国の研究所へ行って見て、自分たちがやっているのと同じ程度のことをやっているかと安心します。

橘 生研公開も毎年続けています。最近は何でも似たようなのが増えてきましたが、生研は非常に古くからやっていますよね。きっかけはどういうことだったのでしょうか。

一色 それは学部学生がいる頃、本郷の五月祭みたいに、年1回開放してたんですよ。それを今度は学生が来なくても、今度は教官の研究でやろうという、それが発端ではないかと私は思ってるんですが。ですから第二工学部がある頃の流れがずっとつづいているわけです。

鈴木(弘) それに加えて、その頃の所長先生が強くおっしゃったのは、産業界と協力して研究を育てていく研究所なんだから、ここの研究所の成果を産業界の人に十分理解をしてもらう必要があると。だから年に1回ぐらいは公開して、産業界の技術幹部の人に来てもらおうということを強く主張なすったんですよ。

橘 この写真では、協議会と呼んでいたのでしょうか、そういう機会に産業界の方がいらしたときにも技術展示みたいなものをやっていたようですね。

一色 そういう展示をやったときに協議会もやったんですよ。

所長 話がちょっとずれるかも知れませんが、協議会のお話が出たついでに、奨励会の前身である協議会のときには、ほんとに産業界を巻き込んでということがあったようですが、いまの奨励会では、その熱意が希薄になってきている

ような感じがします。委任経理金の10%が自動的に入ってしまうという形については、私も少し反省しなければいけないのではないかと考えています。もっと産業界と強いコンタクトをとるために、最初の生研の協議会時代に立ち戻るぐらいの感じで考え直さなければいけないということで、検討を始めつつあるところなんです。いままた10年1日のごとく、いろんなところで産学連携のあるべき姿が議論されています。他に比べると生研はまだいい方とは思いますが、もっと踏み込んだものができるか、そういうようなことを議論しておりまして、その一つのあらわれが、今度の予算が通りますと、文部省の方で付けていただくことになっている国際・産学共同研究センターです。これには生研と先端研から資産を出すわけで、生研からは講師4を振り替え、先端研からは助手2を出して教授8、客員教授8、助手2という形のセンターがつかます。このセンターをどうしていくかといいますと、生研から行った教授は、3年間から5年間、産業界と共同研究をすることによって、実用化といいますか産業界への貢献ができるようなプロジェクトを持って行って、そこで研究する。その仕事が一段落すれば、また生研へ帰ってくるというような運営をしようと思っております。先端研の方からも、3人ぐらいの教授が入れ替わりたち替わりおいでになる。両方の共同経営みたいな形でそのセンターを成り立たせようという考え方なんです。

鈴木 (弘) いまのお話は協議会との関連からお話が出たのだと思いますけれども、先輩の方々が奨励会を作ってくださったのは非常に大きなことだったと思っています。当時は、委任経理金というものはなくて、国の予算は使途と期間に厳重な制約があり、非常に窮屈なものだったんです。研究は年度を越して続けなければいけない場合もあるので、もっと有効に使える基金を持つべきだということから奨励会をお作りになったということです。もう一つは、協議会のほうは、いわばアドバイザー・コミッティというような意味で、産業界の技術出身の指導的な方に生研をよく知ってもらって、いろいろ協力もしてもらおう、それが奨励会をつくるのにもプラスになるというお考えだったので。奨励会の初代理事長の石川一郎さんは、当時経団連の会長でしたか、財界の大家だったわけですよ。その後、委任経理金ができるまでの間は、奨励会というものがあるおかげで非常に予算的には自由度が大きくて重宝だったんですよ。

橘 もちろん今も生研は産業界との関係が他に比べれば非常に密接ですが、個別化してきているような気がします。

所長 そうかもしれませんね。

鈴木 (弘) それと似たもので、航研が後におつくりになったので顧問というのがありました。3人ぐらい産業界の有力な技術者に顧問になってもらっていましたね。

橘 さて話がもとに戻りますが、麻布移転が決まるまでのお話はだいたい伺いましたが、実際決まってからいろいろご苦労が、特に勝田先生などずいぶんいろんなところとも交渉されたというお話を伺いましたけれども、いかがでしたか。

勝田 交渉というほどのことではないですね。国有財産使用の手続きの進み具合を見て、生産技術研究所の事務に連絡するだけぐらいなんですよ。今度の移転は大学の土地の中のようなので、生研については難しさが少ないと思います。ただ大学の中でもまた一般の場合と同じようなことがあって、これは前に約束があったとかいうようなことがあると困りますね。麻布の跡はどうなるのか、柏の土地はどう進んでいるのか、関係があると思うんです。

橘 3極構造が決まるまで岡田先生なんかずいぶん苦労されたようですね。

所長 そうですね。いまのお話について申し上げますと、もちろん東大の3極構造の中で六本木の土地を資源として考えるということが吉川先生周辺の根底にはもちろんあるわけですが、そこで我々としては、そういうことで東大全体のプラスになることであるならば、六本木の土地を役に立てていただいて結構、そういう形で積極的に協力しましょうということ。しかし、生研だけが不利益を受けることは大変困るわけですし、生研としての部局自身の将来計画をきちんと満たしていただけない限り、これは3極構造構想にも協力はできないことになります。

いま駒場の土地には、人工物工学研究センターとか、気候システム研究センターなど、さらに文部省に移ったとはいえ宇宙研の一部がまだ残っていたり、建物がいっぱい建っています。そこをともかく全部きれいにして、新しい建物をつくってもらって先端研と生研と、さらに今度の新しい国際・産学共同研究センターでそこを利用するということです。順番にいまの建物もどこかへ移しながら建てていかなければいけないので、実はこれは並大抵のことではないわけです。それでも、我々としては、きちんと将来計画を満たして全部そこへ移り住めるように、6万5000m²に限りなく近いものを常に要求し続けまして、それができないと六本木の今のキャンパスを明けるわけにいかないという態度表明をしています。これは新聞情報ですが、文化庁の計画では、生研の跡地の利用として、きれいに建物を取り払って2000年ぐらいにナショナルギャラリーをつくりたいということです。これは、我々が完全に移転しなければ無理です。我々としてもこのような計画を追い風にして、ぜひ駒場に十分な施設を作ってもらって、2000年までに六本木を明け渡したいと、こういうロジックでいこうと思っています。

勝田 3極構造ということで、もう始まっているわけですね。大変なお仕事だと敬服しました。PRという言葉は適

切でないかも知れませんが、これから東大内部と外部を含めた3極構造の有効な情報交換が必要でしょう。

所長 そうなんです。いろいろ将来予測にも不確定要素がございまして、柏がどう動いていくかというのも大きな要素です。最終的には36ヘクタールというとても大きい規模ですから、それに振り回されるという恐れがあります。もう一つは、吉川先生がいま3極構造を進めておられますが、次の総長にどういう方がなれるかというのも大きな問題です。3極構造というのはこれはもう理科系優先ですからね。文科系の人からみると、そんなに拡張しなくてもいいのではないかと思うかも知れませんが、いろいろ心配はあります。

勝田 心配ばかりしていたら、何もできません。ちゃんと筋を立てたら、それに沿って進む。鈴木先生は、僕らから見るとずいぶんがちりと自分の筋を立てるほうなんです。だから結局はよかったですよ。

鈴木(弘) いやいや。勝田先生のおっしゃるとおりだけれども、やはり生研だけが得をするという内容では絶対にだめですよ。生研も得をするけれども、東大も喜ぶ、大蔵省も喜ぶ、国も喜ぶという案を常に維持しないと実現しませんよ。最初からその配慮をしておいてこそ、生研の方針が貫き通せるのです。

所長 国の財政の枠が決まっていますから、生研だけが拡張して一人勝ちをするという形は避けなければいけない。他の研究所、たとえば海洋研とか物性研も先端研もやはり拡張計画を持っているわけですから、むしろ生研がいい研究所をつくるのがよい先鞭となって他にもプラスになる。他が拡張するときに役に立つ、そういうロジックでいま進めているんです。

鈴木(弘) さっき橋先生が質問なすった移転のときにいろいろ苦勞が多かったのではないかとということですが、千葉から東京に移転のときは、移転実施委員長が星野昌一先生で、副委員長が私だったんですよ。私に関する限りは苦勞はまったくなかった。やはり生研というのは皆さん非常に合理的にもの考える方が多いものですから、具体的な移転実施は非常にスムーズにうまく進んだように思いますね。

勝田 引っ越しの具体的進行については、全然苦勞しなかったですね。

一色 移転のとき問題がなかったというのは内部の話で、対外的にはさっきの話のようにいろいろあった。移転は3年かかりましたが、どの部が先に行くかというようなことは大した問題ではなかったと思います。どうせ3年たてばすむことでしたから。

鈴木(弘) だいたい工学系の人には合理的にもの考えるのですが、特に生研はみんなが一体になって合理的に考えるという、そういう体質が出来上がっていると思いますか

ら、中でよく会議をして詰めておかれたら、内部の結束に関しては大丈夫だと思いますね。

橋 麻布移転のときには、面積が限られてしまったということで、千葉へ残すものと、麻布へ移す施設についてずいぶんいろんな調整があったのではないかと思います。

鈴木(弘) 大型実験は千葉実験所で実施するのが当然と考えていたので、やむを得ず残す施設というのはなかったですよ。

一色 移れないものだけは向こうに残した。

鈴木(弘) 高炉なんか絶対に移せないし、また移らないとおっしゃった。だから話は簡単だった。

橋 そういう意味で簡単だったということですか。

所長 千葉から麻布に比べれば、六本木から目黒なんてほんとに近い引っ越しです。そういう意味では大変心強いお話をお伺いできて、それでちょっとほっといたしました。

一色 ただ職員の人で千葉に住んでいる方が多かったわけです。そういう方は通勤が非常に不便になる。そういうことで何年間か、千葉から来る人は何分までは遅れても目をつむるということはありません。今度は場所が近いから、そういう問題はないんでしょう。

所長 それでもアンケートをとりますと、1時間余分に時間がかかるなんて回答が返ってきたり(笑)。せいぜい30分ですよ。物性研が麻布から柏に移るというのに比べれば、問題としてははるかに軽いだらうと私自身は思っていますけれども、なかにはいろんな不便を感じる人もたぶん出てくると思います。それは個別に考えなければいけないと思っています。

鈴木(弘) 最初に関野先生が大変貴重な資料の存在を教えてくださいましたのはありがたいことだったと思います。先生のお話では、最終的にまとめたものだけではなくて、原資料もあるようですから、ご苦勞ですけれどもどなたかお調べになって下さい。

一色 私もこの間ちょっと第二工学部史を見たんですけどね。各学科の若い先生が思い出を書いています。機械では鈴木先生が書いてますね。冶金については西川精一君が書いてます。そういう人に、なんか思い出を書いてもらうといいんじゃないでしょうか。

鈴木(弘) 下村さんは、手元にしっかりした資料がないので資料的なものは書けないが、随想的なものでよければ、もし自分の書いたものが役に立つような形で残るのであれば、喜んで書きますとおっしゃっておられます。

所長 今日は貴重なお時間を割いていただき、また遠路おいでいただきましてありがとうございました。今日のお伺いした生の生産技術研究所の歴史を、何らかの形で現在の生研の構成員の人たちにインプットし、それを将来の生産技術研究所の結束と発展につなげていきたいと存じます。

また今後ともいろいろよろしくお願ひできれば幸いに存じます。

橘 この座談会の記録は、後日取りまとめまして「生産研

究」に掲載させていただく予定です。本日は長時間にわたりますて本当にありがとうございました。



OB 座談会は本年 4 月 27 日 (土) にホテルグリーンタワー幕張で開かれたが、それに先立って、関野克、一色貞文、鈴木弘、勝田高司の各名誉教授の先生方に本所千葉実験所にお集まりいただき、ちょうど満開の八重桜の下で、森瑩子さん(本年 4 月定年退職)による野立てでお茶お楽しんでいただいた。